

# ミオヤの光

## 精進の巻

- 1 日日三業に作す所悉く念佛……………一
- 2 分岐點……………一
- 3 汝龍兒……………四
- 4 いつも大悲の懷に……………七
- 5 一人も多く親子の名乗り合ひを……………八
- 6 光明裡に安住して活動……………一三
- 7 暖なる靈氣に催され……………一五
- 8 如來の力を力として……………一八
- 9 のりのいと……………二二
- 10 經……………二二
- 11 聖教の友……………二三
- 12 心のすまひ……………三〇
- 13 會報及社告……………三二

### 日々三業に作す所悉く念佛

大ミオヤの在まざる處なく御恵みの加はらざる時なく御力と御恵みとによりて活  
 き働さるる御子なれば家庭の灑掃應對進退より裁縫洗濯熨染乃至すべての作爲として  
 聖き命令のつとめならざるはなく、必しも三味道場の所作のみならず日々三業の作  
 す處悉く念佛ならざるはなし。口に稱ふる念佛は狹義の念佛にて一切三業の所作悉  
 く佛作佛行然ながら是念佛三昧にあらざるはなし。されば勇みくつとめつくして  
 よ。

### 分岐點

さきつ頃はなにかにつき御心つくしのほどかたしげなく悦びの極みに候。御こゝ  
 ろばひのほど頼母敷感じ申候。まことに惟れば時光の過ぎゆくことのいとはや

く、此頃新たに年越迎ひしとおもひしに、もはや三月の半とは成にけらし、實におも  
 へば無常の世の中やおもふにつきてもますます心していきみくつとむべきぞ聖旨  
 に仕へ奉る事にて候。

大經を拜見し奉れば此世の一日一夜聖旨に仕ふる事至誠にして精進ならば彼淨土  
 に於て百歳修業するに勝れたりと。時計の針の一つくを一秒間位はわづかなりとて  
 空費してなすごしそ。其一つくのつかの間のそのつもりくた生涯にわたりて無  
 量永劫の光明にすくむのもまた闇路にまよふのとわかれゆく分岐點にてぞある。大  
 きく云はゞ釋迦牟尼佛のごとくに至真至善至美の極みに達したるも、地獄の底に沈む  
 やうな提婆達多も日々に秒々のなかの心の用ひやうのいかどやかく無上世尊と成るべ  
 き基本にてそのあなたの靈の感情の奥底に潜在しておる、えもいわれぬ尊いとも有が  
 たいとも楽しいとも悦ばしいともいかなる言葉も詮表する事出來ぬ靈感を感ずべきも  
 のが伏在するそれはいつ顯現するものであらう。

人間の感情の奥には種々の事色も香もある面白きもの悲しきもの恠恨に耐へぬもの  
 うれしきものよろこばしきものあらゆる感じのあるものが伏在して居る伏在して居つ  
 ても本能のまゝではたとへばいかに美しき色香を有する花にてもまた咲出ざるほどは  
 見ることはできぬやうなものである。あなたがまた二人の令嬢を持つて見ぬほどは  
 子に對する可愛といふ感情の實感はかやうなものであるとは感せざりしならむ。また  
 澄惠嬢の先だちなされし動機にあはざりしかば哀働の實感に實に此やうなせつなきも  
 のなるを経験せぬむかしは想像にも出來ざりしことならぬ。全體其哀働の感情なるも  
 のは先だたれし嬢の方にあるものなるか將たあなたの感情の實在なりしやといはば、  
 其感じ其ものはあなたの情にありしものなりし。さればとて若生涯其機會にふれざれ  
 ば自己の奥底に此やうな性能の伏在するものとおもはざりしならん。先だたれし嬢  
 はあなたの爲に人の本能の奥底に伏在する處の非常なる感情の味を實感させる動機を  
 あなたに供したので、尙更に進みてあなたの奥底に潜みて居る大ミオヤとの靈的感應

の間に感すべき靈感を發現すべきやうにあなたに御いさめ申たるわけにて候。  
 若澄惠嬢に交靈術を以て暗らしめば、オカーサンあなた本とうにおいたかつたのでせう、涙の血があれほど出たのですもの、あなたの涙の血の出る傷口をわたしがこゝにおつて、いくら力を入れておさいて居つてもくつをへだて、痒くよみ力のとどかないので、其でもオカーサン其傷ましい感情は今にしたいやうに其反たいの方にもつとく何ともいわれぬ非常な感のつよい味にて大きなくおやさまに御あいなされて其あいだに起る靈感であります。靈的 實感を得たときにわたしのあいだに感じてゐるおいたい傷口もなをります。傷あとはあなたのわすれがたみになり其ときに損害ではなかつたと云やうに感じられます。

汝 龍 兒

面白く手まりつくてふ尾花の戯れ、まがきに匂ふ白菊の花、みな但ながら大ミオヤの不可思議の御手に成りしもの、我ら人々を たまふ御慈しみの現はれと信する時は眼に樂しみを感と共に胸にかたじけなさを覺え申候。此頃懐かしき清き同胞のきみの御玉章に接し 承はれば大ミオヤの慈光の下にますく御信念のすゝみなされ候こと實に隨喜此事に候。

惟みるに世に宗教の種々に分れたる中に或は何れも共通の點ある中に各特種の色を異にするあり。或は客體に慈愛に満てる慈父を信せず自己是佛と悟る主義あり。または自身は全く罪惡の性のみなれば神の慈悲よりみたる子の贖罪によりて救はるゝものと信する主義あり。何れを是とし何れを非とするの理なしと雖 我ら一切衆生本來のみ子たり佛性を具有す。然れども大ミオヤの大慈悲の光明に攝化せらるゝにあらざれば佛性の卵も孵化するに由なし。さればミオヤの大慈悲の光明は普ねく十方世界を照しミオヤを念する人は其慈光に攝取せられて佛性の卵は孵化し、信念の眼を開きて見ればミオヤの慈悲の面かげは彷彿として在すが如くにおもはれて、恒に龍兒を

慰藉したまふ。眞實に親子親縁近縁増上縁の如來の聖龍のいとに結ばれて、意に親しみまつるのみにあらでますく靈性を育まれミオヤの全きごとくに全きに向上せしむるみちからを ひとの得らるゝ。釋尊の教えに依りて彌陀と親子と名のりあふことのできる宗教に値ふことを得たるは實に 幸の至りにぞ感じられ候。  
 まことに恒村家の御家庭に  
 大ミオヤの智慧と慈悲との光に成れる觀音勢至の二人の菩提薩埵相携えて光明のなかに彌光榮を現はして大ミオヤの慈悲の乳を有縁の同胞に頒ちつゝある事は實に隨喜に不耐候。

我らが此身體は太陽の光(エネルギー)を本として活かされつゝあり。我らが心靈はミオヤの光明に依りて活かさるゝ。或宗教の如きは自己是佛として譬は太陽の光によらずして活るごとくに心靈の活るは眞に活る宗教として生命有り得らるゝとみ申候。また父は犯したるものと直接に逢ふことはゆるさじ、一りの子を以て贖はしめて子を通じて我を信するものは天國に救るなりとの御慈しみも有かたくは存すれども、更にすゝみて一切衆生は悉く吾子なれば眞に我名を稱へて我に來れよ我慈悲の懷に攝めて汝が靈性をあたゝめて汝が心の眼開くときに我は汝が父汝は我子なりと汝が自覺するの曉遠きにあらじ。我釋迦と分身して汝が所に現はれしは汝龍兒にオヤの慈愛を示さん爲なりとのミオヤの慈悲をおもへば實に辱なくを感じられ候。

いつも大悲の懷に

時分柄寒さに向ひ候折、御全家大ミオヤの慈悲のあたゝかなる光明の中に、光榮ある日ぐらしのほど大慶此事に候。各地ミオヤの光明宣傳にいそしみ、昨夜歸寮して御書翰を拜見し且つ御心簡めさせられての御内室様の贈物に接し候。かさねがさねの御惠贈感謝に不耐候。

是まで關東の心田の開拓地にて光明宣傳につとめ申し候きて願れば世は無常  
 しばらくも停ることなし、先に耐えかぬ熱き日にも御宅にて、大ミオヤの御慈悲と  
 あなたの清き信念によりて心涼しく暑さを忘れて御地の同行衆と一會の三昧をつ  
 とめたる日は己に過ぎ去りて、初めて豊川の清き同胞衆に値遇して、盡未來際にまで  
 のちぎり結びし思ひ出多き今年も、もはやわづかにてわかればならぬ日とはなり  
 ぬ。

娑婆の月日を數ふれば止まらぬものから、また一面に心を静めて、大ミオ  
 ヤの大慈悲光明の方より思ひ上ぐれば、常恒にかはらぬ、いつも大悲の懐に唯有  
 りがたさと尊さとにみたされ、寝てもさめても光明の中なるを思へば、暮もなく明  
 もなくいつも常磐の春はのどかにて候。

一人も多く親子の名乗り合ひを

欽復、祖山にて御別れ申してより既に一ヶ月あまりを經にけらし、實に光陰の過ぎ  
 行くこといと疾くして白駒停め難し、其後西のそなたに吾同胞の懐かしく思ひ居り  
 候折、御書翰に依て承はれば、三昧尊像も御表装出來、殊に三日間別時三昧御營  
 みなされしとの事、何とも隨喜に不耐候。尚吉川老上人及び富田上人を請じ、百餘  
 名の爲に法施を興へられしとの事、實に有難く遙かに悦び上げ候。さて吾懐かしき  
 清き同胞なる、清居士よ、人身受け難し、佛法遇ひ難し。然るをお互に受け難きを受  
 け遇ひ難きに遇ふことを得たる、何の幸か之に如かん。殊に彌陀の本願に遇ふて念佛  
 衆生の中に加はり、常恒に如來大悲の光明に攝取せられし身となりし事また喜びの  
 中の喜にて候。昔は念佛だに申せば順次の往生遂げらるゝ事を喜びたりしが、今  
 は寝ても覺めても大悲光明の裡に暮さして戴く身に成りし事をよるこぶ。淨土の安  
 心は、所求所歸去行を思ひ定むるを安心と云ふと古徳示したまひけり、即ち所求極  
 樂に生れたき爲に、所歸彌陀如來に歸して、去行一心に念佛申し候へば必ず極樂

に生ると安心を定め候。尙更に進んで此の世とか後の世と云ふのは凡夫の方から見  
 るものの、本より如來の絕對無限の光大明中には此世もなく未來もなく、十方徧照  
 の大光明、吾人は目にこそ見えね、あみだ如來てふ絕對的の大人格は無量の光明を  
 以て現に吾等衆生を常恒に照護したまふ。我等が聖名を呼び奉ればあなたは之を聞  
 き玉ひ、我等が身に敬禮し奉れば、如來は佛眼圓かに我等を照見し玉ひ、心に如來  
 を念じ奉れば如來もまた衆生を念じたまふ。衆生の憶念すれば佛もまた衆生を憶念  
 し玉ふと善導大師は釋し玉へり。絕對的の大人格は太陽の照し玉ふ如くに、常に我等を  
 照し玉へり。無量光如來の光大明中に光明の名號を唱へ光明に攝化せらるゝ  
 時はこゝもまた如來の中なることを信知することを待。

我等は本、如來法身の子として佛性の卵なり。佛性の卵は卵殻の中にありて自ら  
 大ミオヤの中なるを自覺せざりし。如來は法身としては本來のミオヤ、我等は其卵な  
 り、我等が佛性の卵は自然に孵化して靈き人と爲ることは出來ぬ。我等が佛性の卵を  
 温めて孵化し給ふは即ち報身如來の大慈悲である。報身の大悲光明は常に徧く照  
 り渡れども念佛衆生のみ攝取せらる。我等佛を念する故に心常に如來の慈光の中にあ  
 り、念々に稱名して稱名する如くに心常に如來を念する時は能念の心と所念の彌  
 陀の恩寵と常に和合するが故に心靈があたゝまりて信心開發す。至心に熱誠なるは是  
 如來の大慈悲を念すればなり。至心不斷に念する時は漸く温まりて内容の信心のかた  
 ちつくりて恰も卵中の雛が孵化する如くに如來を愛慕して止まず。曾て卵子の程は牝  
 鶏のあとを慕ふて歩かざれども既に雛となれば、ピョピョ鳴きおやどりのあとをつ  
 き隨ふて行く。我ら已に信心の卵開發する時はたとひ慈悲の御すがたを見ること能は  
 ざるも心には慕ひ申して止まず。弘法大師の「空海が心のうちに咲く花は彌陀より外  
 に知る人もなし」と。我等卵の時は親あることを知らざりき。已に雛と爲る時は親も  
 こを愛し子も親を慕ふ、我が弘法大師は信心の花開くが故に雛子として彌陀と云ふ親  
 を知るが故に彌陀も子を常にあはれみ給ふています、されば彌陀より外に知る人はな

しと。我等も彌陀を信知するが故に彌陀も我を子として愛し給ふ。彌陀に知られみだに愛さるゝほど幸があらうか。

世間の人は其出入までも新聞などに掲げられて數多の世の人々に知らるゝ人をゑらい人とか羨やましがつて居る。深山がくれの朽木誰も知られぬ賤が伏屋に臥す賤女にても信心開發して彌陀を信知する時は其人は宇宙獨尊なるみだの知る處と爲つて日々念々に無量の光明を以て攝護せられて居る。あだなる名を浮世の塵の人に知らるゝよりは如何に賤の女が、大悲のおや様に知られまた深く愛せられある身の如何に幸福なるか。

世の人々は大悲のみをやを唯死後の彼處にのみ求めず、現在我等が如き業障深き身は心に大悲のおや様を離れては日々心の心が地獄餓鬼畜生道に墮落しつゝある身に於てあれば、現在の日々のすべての中におや様を離れぬやうに希はしくてこそ。

清居士よ、願くば一人も多く現在よりおや子の名乗あひをして大ミオヤの照護の下に靈に活き、活々した信仰を以て靈的に活動し今日のつとめまでも悉く如來の加被力のもとに勇ましくつとめらるゝやうな信者をますます出すやうに願はしくて候。

大ミオヤは我等凡てが大悲の乳房をはなれて靈に枯渴せんとするものゝ爲に大悲の懷にあたくめて靈の乳房を含まして我等が靈を活かさんが爲に我等に聖旨をそゝぎ給へり。我等は彌陀の御名を通して其大悲の聖意に活かされんと願ふ。

生れ難き人生若しも空しく闇黒の中に墮しなば何れの世にかは再び光明の攝化に遇ひがたし。願くば今日より、永遠にまで大悲の光明の中に活きんことを望ましく候。居士よ、ちかき程みだのミオヤが我等衆生の子を憶念し給ふ親縁の聖畫を御送附候問答納して給へよ。

光明裡に安住して活動

良に惟れば光陰の過ぎ逝くこといと疾し。もはや今年も二月月経にけらし。無常

變遷の停まり難し。されば此身の奥に心靈の方面に於て、無量壽如來の光明の中に永遠の生命と常住の平和なる涅槃界を認めて其光明中に安住することを得て始めて眞の安心を得べく候。若し一方に無常迅速の有爲を信するにあらざれば、念佛はげむ心も起きざるべし。また一面に常住安穩の光明裡に安住する道を得ざれば眞に安心得ること能はず、此所も彼處も同じく大ミオヤの光明中なれども一方は光明中に有爲變轉の活動を爲すべき處、一面は無爲涅槃常樂の光明の中何れも同じ大ミオヤの光明中只須らく光明の名號をとへて日々進歩し、大悲の聖旨を念じて念々に增長せん。

此地は光明中の刻苦摧勵して心靈を研く處と思へば困苦難難も歡迎せざるを得ぬ。彼界は涅槃常樂の地と思へば勇ましく往きて生れんと欲す。何れも大ミオヤ任せの子のこゝろの安きことよ。

暖なる靈氣に催され

今回、先慈考の彼の淨き御國に在りて道品増進の資に供せんが爲に諸の道俗を請じて四日夜を期して念佛三昧會を勤修なされしこと、實に追考是より大なるはなしと深く隨喜に耐えず候。其の故は何となれば、念佛三昧は正に是、久遠劫來唯生死にまよふ子らを哀れみたまふ大慈父の願意に答ふ三昧にして、佛法に無量の三昧門ありと雖ども、正しく父子相合の眞意は念佛三昧門のみにて候父子の暖かなる心情的融合する處に宗教の眞髓は在りとは古賢の共に唱ふる處、此念佛三昧を修して先慈考の追隨に資する事寔に所以あることにて候。

聖德太子念佛法語に、念佛は情に在りて理に在らず、風人の月下に我を抛つとき、萬邪皆忘れて理にかはらざる如しと。實に爾か思ふ。假令いか程理論の上に有神論を述べやうとも彌陀の實在を巧妙に論ずるとも、理論を以て眞の信仰の眞髓を得たり

といふ可からず。若し夫れ自己の全生命を彌陀の中に献げると共に大慈の懷らに居る時、我は慈悲の暖かさに融け込みて、自づと忝けなきになむあみだ佛々々々と御名を稱ふ外無きに至る處に念佛三昧の妙趣感せらるべく候。

良に權みれば彌陀は今にはじめて御名を聞きたてまつるとおもふもの、實には久遠劫來の我が心靈の大慈父、久しく御別れ申して已降、慈父のいますともおぼほへでたゞ六道輪廻の迷子となりて幾ばくの劫數を經にけん。宿命通なき凡夫のことなれば遠々たる過去の久遠を知るに由なくも、遇ひがたくして今遇ふことを得たりし。若しも此のたび空しく經もせば、無窮の生死出離の期なかりしを、大慈父の子を哀れむの遣る瀬なきにや、むかしは法藏比丘と名乗りて、ミオヤの慈悲の子をおもふまことを示したまひ、また近くは釋迦牟尼と號して、慈父のなきけ貧里にさまよふ窮子をあらはれみ、慈父の御許によはひ寄せて有ゆる無盡の寶を悉く附屬したまはんと思召したまふ。釋迦の教へによりてつらつらおもんみるに、彌陀は我が心靈の大慈父にして久遠劫來わかれし子等をしばしも念じたまはざることなきを仰ぐ。然れども子等は左とも思はで自から空しく貧里にさまよひける愚かさをおもへば實にあさましきことよ。されも大慈父の深き御慈悲いつかは慈愛のいと暖かなる靈氣にもよほされてや、未だ曾て經驗の爲せしことなき感情の奥底より萌え出づる、えもいはれぬ一きわの靈感こそはまさしくミオヤのなきけにあたゝめられたる心靈の萌發したりと言はめ。温かなるみめぐみにあふて、きはみななき靈感こそは、みむねに養はれて萌したるしるして旂檀は二葉よりかうばしきの旂に似て候。妙にも芳ばしき感じに生きたる根ざしは、大ミオヤの慈父の育みをたえず蒙むるべき信根とこそ名づくべし。常らにみむねにたよる感情的に血のかよふ暖かなる父子のなきけは實に床しけれ。既に信根生じ得れば、あたゝかなるみめぐみにみたされて頓ては信心の花開きて、常磐かきはに咲き匂ふ心に靈感極りなきを覺ゆる日の來れかして唯聖名を稱へて聖寵を仰ぎたまへと御すゝめ申述候。願くば笹川家のいと暖かなる家の庭に咲匂ふ花のいよ、榮

えかして、大慈父の尊き御名を稱へていのり奉り候。

如來の力を力として

大慈の大ミオヤの慈悲方便を以て豊川の里なる清き同胞衆に遇ふことを得たるは實に悦びに耐えざる處、殊に如來の光明照りわたる笹川家に於て諸びとの爲に法縁を結びたりしは寔に喜の極りなりき。惟ふに豊川村の中に就て小野原の里人は、笹川家の如き如來の光明の家庭の園に麗はしき花匂ふなる模範を戴けることは實に幸福の至りに候。一家仁なれば一國讓を興すとの格言、笹川家の信仰は一村の信念を興さしむる原動力にて候。小野原の里に信仰の強き實に所以ある哉。さて過日まで當道場に於て十八日より別時三昧會北に東に西に殆んど日本全島より集へる善男子善女子凡そ三十名餘、中に帝大卒業生四名の如きは最も猛烈に信仰を興し申し候。念佛三昧の妙味を味ひ申し候。實は先日來御來場を待ち訃申候へども御出なきは稻野さんの御都合の爲と存じ候。何れまた來月下旬の如來様より與へらるる日を待ちて御面會を期し申べく候。實に現代は我日本國民の爲に御家の如きを模範に戴く小野原の如きは實に模範と爲すべき部落にて候。おもふに我日本國民は已に知識の方は長速に進歩を爲したるも、道德の根底に爲るべき宗教の如きは青壯年の間に忘れられたる如きは實に我國民は知識の片足を長く延したりとも未だ宗教に依る道德の片足の短きは片跛的の國民の誇りを免るゝ能はず。是全く爲政治家の誤たるは勿論なれども時代を救ふべき宗教を以て國民を指導せざる宗教家の罪たることは實に免れざる處。

佛教にて古來時機相應の宗教と云如き維新前の文化未開の時代の傳道法は將來は適當せざれば唯未來主義ならざる現在より未來永遠にまで救ふべき如來光明主義にあらざれば將來の國民を救ふこと能はず。

世が益々進めば進むに隨て生活難と云ひまた活動も激しくなれば隨て現在より

精神的に衆生が闇黒にある者を、如來の光明によりて精神的に救ふに非ざれば現在から皆精神的に地獄の苦を受けつゝある人間なれば、精神的に現在より如來の光明に接觸して精神的に生れ更りて現在はいかに激動中にも如來の力を力として勇み進みて世におくれぬやうに活動するにあらざれば、佛教は世を救ふこと能はず。即ち徳川家康が登壇上人の教化に依つて精神に生れ更りて念佛を以て天下を治むる働らきの如きは昔に在りても念佛が人を活かしたる好模範にて候。

念佛は全く人の精神を靈的に復活せしむる妙法にて候。念佛は全く死の爲に非ずして靈に活す妙行にて候。一心に念佛して彌陀の光明に攝取せらるゝ時は心靈的に復活して俗も鵝の卵子が雛に變化する如き、人を靈的に活す處に念佛の眞義あり候。一切衆生悉有佛性、人の佛性の卵は如來の光明に攝取せられて初めて變化せらるゝ。唯念佛三昧のみが光明に攝取せらるゝ心行にて候。已に信念成ずる時は、身は娑婆に在り乍ら心は淨土の人である、即ち彌陀光明中の人なり。經に若し衆生ありて斯の光に遇ふ者は三垢消滅し身意柔軟に歡喜勇躍して善心生ずと。是れ念佛は精神的に人を活す妙行の證にて候。

笹川家は實によき光明中の家庭を造りなされる御家にて候一家の家庭に於て父と母とは、如來の智慧と慈悲とを以て子を養ふべき觀音と勢至との使命を被りたるものにて候。願くば笹川家の觀音勢至としての父母として御子供衆を光明の中に好き性情を養ひ候やうに望ましく候。殊に家庭に於ては父母の職責は最も重き事なれば、願くば御内室に望み申候ことは如來光明の中に意味ある價值ある家庭中に御養育のほどを希望に耐えず候。御内室様には實に麗はしき信仰も有之候へば實によき御家庭を造るべき觀音の使命を果すべき適當の御性質に候。先日御話の中に、愚訥に遇ひ申し候との事實に不思議なるの因縁願くば愚訥が御願ひ申候ことは、如來の光明の中に御子息女衆を精神的に美はしく御養育のほどを望み上げ候。尙くさくさ申たく候へども後便に譲り申候。

のりのいと

あみだほとけの法のいと、  
心の玉につらぬきて、  
同じはちすの身とならば

この露の身はこゝかしこ、  
心はずとの緒を通うし、  
しばしがほどは別るとも、  
同じさとの身とならん、

のちこの經をよむ〇〇〇  
なかばをちぎりしこの友を、  
おもひ出すらむ花の上に、  
ふかきまことの友として、

清き御法のいとぐちを、  
また兄弟も友だちも、  
心にとほせ親も子も、  
この一すちの法の糸、

ともに心に貫きて、  
親子夫婦も兄弟も、  
同じく無爲の身とならば、  
六親眷屬友だちも、  
同じく無爲の身とならむ、

經

この量りなき光なる經を以て衆生の心の珠に貫き徹して、悉く阿彌陀法王の實験に備へんと欲す。

我等が心の珠は無明永夜のねむりふかくして生死苦界の中に流轉してやむことな

し。  
 我大聖釋尊がやみの世に出興ましましてこの常流轉の心をして常住不變の無爲の妙業を得せしむる要法を教えたまふ。即ち阿彌陀經、光りあるいと、きれることなきいと(無量壽)

能證の經、所證のいとしん(名號)衆生の心に徹して因より果にいたらしめば六道の中に墮落せずして淨土にいたり乃至佛果を得ん。

因とは此所依の經によりて宗(所歸)、體(所求)―安心。用(法行)―起行

この經を愛持讀誦書寫解說如說修行の宗體用即ち安心起行の因より果につらぬくべし。

果、とは臨終見佛超生淨土、見佛聞法、入正定聚、住普賢行願、乃至、無上佛果。

ア、妙哉奇哉此一本の經、上は文殊普賢馬鳴龍樹等の此土二十七聖の類より下は十惡五逆の類までも貫き徹す。此經文殊普賢の心のあなに通ずるに細しとせず黑白不明の恩師漢の心のあなにとせずして通ず。これを以て不可思議と云はずして何ぞや往昔吾祖光明大師はこの經を用うるに事相を表として自ら裏に理を全うせしめて衆生の信心を徹して淨土にいたらしむること數ふ可からず。佛法東漸以來未聞のはまれ流れて東邊の土に聞こゆ。

明の行禮神積齋の類は理を表とし事を全うして巧に時機に被らしむ。

この經いろをかへていかなる機にも通せしめて衆生を利することまた不可思議なり。

また染め易て美や獨などにしてよましむるのまた妙ならむ哉。

愚痴此の奇々妙々不可思議の經を有しながら針(釋尊の説)を以ていかなる機をも漏さず徹すことの能はずとはなかるべしとおもふ。

一染の經繪は此一經によりて持し、

世界の人を見るに自ら正確なる一家經倫あり常規ありと謂へり、然れども肉體濟生の活路に過ぎず。豊なる活路あれば經倫正しきとおもへり。ア、黑暗の甚しきにあらずや。從冥入冥、此因ありて此果に通じ此道によりて此處に到るといふこと聞き凡夫の知る所にあらず。唯大聖の經教を信じて所依の經を定め宗體用の因を全うし一蓮乃至平等正覺の果を期す。斯の如きは明なる正なる誠なる經によらずしていかでか經倫あり常規ありと云はんや。

一家にありては主人を始め主婦乃至悉く此經を心に徹して因より果にいたらしめよ。

夫婦も此經を以て契を結ぶべし。たとへば僧老同穴もたゞ形氣の情をつくすのみにして識異處に趣き空骸同じ土となるも何のたのみかあらむ。願くは夫が心に徹うせる光ある經を以て婦の信心に通じ法によつて同じく一蓮の契を結ぶべし。因にあつては所依の經心行業を同うし果にあつては一蓮俱會、所證平等の妙果を期し、たゞ肉體愛欲を以て足れりとせば禽獸なほ離雄あるにあらずや。

この頃世間を見るに夫婦の愛たゞ形氣をかざりて契り神識に及ばず故に形氣の欲久うして厭ひあけばまた情を佗にうつす。ア、まことにあさましきに非ずや。然るに法を以て契り道情を以て夫婦たるときはこの形氣おとろふるにしたがつて當來一蓮の樂いろまさり形氣盛なりとも形よりも精神の道情深ければ實にゆかしき夫婦の契縁にあらずや。

若し父子になつては父平生此經を以て心に徹し、また子につたふるに此の經を以て常法とせば明にして且つ樂しき定規にあらずや。此正しき大道父先に、子したがふ、實に道ありとは此の謂にあらずや。

世間に肉體の血脉を重んじて皇統連綿とか源平四姓とかを論ず、これ唯形骸あるを知つてこの神識を忘れて論ぜざるは理のくらきに非ずや。佛日世に出でまたなき經を以て緒を示して我らに與へられたり。世の父たるものは實に心の明なるものなれば、

この光量のなき經を以て汝ら心に通し因を全うし果に徹せしめよ。また此の經を以て汝が子孫に徹せしめよ。しかる時は汝が子孫百代また連綿として其聖統を神識に紹きてみな淨土に往生す。實に義ある仁ある禮ある智ある信ある父子にあらざるや。

兄たる人に。汝にして此の明に正しき經によらずんば弟もまたそれにしたがふべし。冥より冥に入りて苦に没する汝自ら忍ぶべきも弟の苦を豈忍ぶべけんや。若し弟までも斯の如きの苦を受けしむるは因中にあつて汝が道にくらき心のなす業をいさなひしにあらざるや。早く此の經によつて因を全うしよき果を結ぶにいたる時をけふよりまつべし。弟も必ずしたがはん。實の兄弟とは是汝この謂にあらざるや。

朋友につきて此の經を行はしむ。

よき友を撰ぶ時は益あり、あしき友は損なり。必ず撰ぶべし。たとへ口に甘きも毒あるものは食する勿れ。たとへば汝を惡しき所へ誘はざ汝が放なる情しばらく快樂とおもふべけれ共そは汝を害するものなり。汝は有爲の人ならば有爲の志を起すべし。汝この因には此の果ありこの道を行けばこの處へ到るといふことを知らずんばあるべからず。汝が神識をして妙なる不可思議の妙處に到る道をみちびくものはこの經なり。斯の如きの妙處に到るものは因中にありてもまた心のうちに自ら限りなき樂あるべし。この經にかなふ友はまことの友なり。汝に大なる利を與ふる人汝をして後に大福長者にならしむる友なり。たとへ斷金の交りといへども此の身かぎりありてこの身ばかりにて情を盡すとせば、たゞ一時の迷のため朋とすなり。いまいかなるいとを以てこの親しき友の縁を未來無窮にいたさん。こゝによき朋友の親みをつなきて斷せぬ經あり。此の經を以て口々に互による時は身はへだつとも心は同じく淨土八池のほとりに遊歩の思ひは七重樹林の會にかたりあふ。まことに懐へば にあらずや。果には同じく淨土に生じ俱會一處の樂しき無量壽の(以下斷章)

聖教の友

一家の友  
聖教をよみて淨利を欣ひ金言を翫んでかの十樂を求め如説のみちを行しておもひを西方にはこび無量光王の民となり諸上善人の中につらなり俱會一處の勝友なれば俱會一處を期する友どもなればこれを聖教の友とはいふ。

家族の友

一家の中食事の時には面と面とを相對してかたりあふとも心と心とはみな別々になれり。しかるに一家の主一日の中一たびあるひは朝夕聖教の一節をよむ衆みな攝心して意を經に注む。たとへば、  
是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり極樂と云ふ其土に佛ましますアミダと名づけ奉る今現に在して説法したまふ。乃至。極樂と名づく。

この時にあたつて意を交意に注むるときは現在説法の大會につらなり衆苦をわすれて微妙の法樂を得べし。  
この時は一家のひとつの意と意と共にかのきよらげき樂園に入り慈父金容の満月相のまへにて微妙の説法を聞きたてまつり無量の法樂を受くる想をなすべし。これを家族の友と云ふ。

日課同行の友  
月の一、從是西方過十萬億佛土、乃至、今現在説法。二日、七重行樹。三日、七寶池。

毎日教友は一日より三十日まで同じくこゝろの手を取りて同じく淨土の樂園を遊觀す。

郵便の友

世のならひいかほど親しき友どもなりとも東西隔遠する時は心と心のうちより親し



み今後世の一蓮のたのしみ精神の上をかたりあふこと能はず。故に先に郵便を以て甲の人より乙の方へ郵便もて聖教のうち一章段を示して何月何日何時よりたとへば舍利弗汝が意に於ていかに彼の佛國には如是功徳莊嚴を成就せりまで。(以下斷章)

### 心のすまひ

經曰、阿彌陀佛を説くを聞いて名號を執持すること、云々。

安心を同うし心の住する處を同くす、一家にすむごとく心のすまひなり。この形體に定まれる栖ある如く、身佗に行くもいづればこの家に還りて心を安くすること、心に安宅をかまへざる心はつねに定まるとまる所なく見るに聞くに甲より乙に轉すること、身家に在れども心は外にあり身は佗所にありて想は家に在り何れにとまりて定まる安宅たるを定めずんばあるべからず。念が常に阿彌陀佛おまかせの我が彌陀大光明の中にあり、彌陀大光明の中にあり、彌陀大尊の前に在り。彌陀慈母の懷にあり。彌陀法王の光明殿にあり。之を以て常の安宅とせば心この外に有る時は佗に出でたり、佗に出づる故に或時は艱難險阻の處にいたり却災を被る時に於て名號と共に彌陀覺王の前にいたれば安然としてまた樂し。心彌陀に在るを以て安住所とせよ。

吾教友は身はこゝかしこへだつといへども心は共に彌陀覺王の許に一大光明殿中にあり。わすれて他にいづるも覺すれば法王殿にかへる。この世にあつて心を一の安宅に住す未來は同じく無量壽國に行いて形に異状なく虚無無極の體とならむ。

一心不亂

起行を同じ心の道づれなり。心は無常なる生住異滅。念々遷流の心の旅、往想回向の淨土の道。去行、一向專念の彌陀名號の念々捨捨の心の足を運びぬる皆淨土の道づれ。

經をよみて共に淨土の樂園を遊觀する想も觀察して念々彌陀に直參するもみな是念

々淨土に往還の道づれ、心と心は日々夜々同じく淨土の道づれば相たすけて、夫婦兄弟共に相たすけて精進して淨土の正行を運ぶことまたたのしきことにあらすや。

所歸は宗なり。即ち念佛三昧を宗とす。念佛は即ち彌陀法王の御名、名體不離なれば、阿彌陀佛を本尊とす。主とす。我等の命は彌陀に歸す。我等主に歸するが故に主は我等を攝受して我等をいづる。我らいま主に投す主よ攝受せよ。主に歸する處主と我等と等しく持して能所一致するもの念佛三昧なり。

趣求、我等が最終の目的最大の幸を得んと欲するものは清淨國土即ち極妙樂土に往生せんと欲するにあり。此の六道輪廻は魔境なり曠劫このかた 歸去來。

法種、たとへば世間の受精の因縁、形質の種因父による如く佛種縁より起る。今彌陀慈父の本願名號より法王の子となり發心無量の門ある中に於て彌陀法王の名號を種因として念々の法種を増長す。我等念佛するものは賤女輪王の種を宿す懷のたとへに知るべきのみ。我が教友は彌陀慈父の子、淨土にありては觀音勢至、この世にあつては善導元祖等と共に彌陀名號を正因として發心す。

經曰、執持名號。汝好持是語。今此世に在つても夫婦兄弟の縁ふかし、心にあつては彌陀法王の同じ兄弟、何ぞぞ親しからずや。盡未來際其の兄弟夫婦ならずや。

同じく心は彌陀大光明殿に住し念佛三昧の法味を食とし慈悲攝受の恵を被るかに悦しからずや。

所念の

法身の彌陀を以て能念の體とす。

所念の

彌陀圓滿報身を以て能念の相とす。

所念の

念々應身の彌陀を以て能念の用とす。  
是念佛三昧の

安心所求所歸去行之三思定、起心立行横豎三歸命二字、

◇自分に、實に申分なき身の上と思つて、安心して居るが、若し先年の大震災の様な、不時の慘事に出遇ふて、悲しいドン底に落される様な事があつたら、其場合如何な處置を取るだらうか、我を忘れ、醜態を演じはせないだらうか。

◇千萬圓の富を有すとも、死に面しては、それが何の慰めとなるであらうか、物質にのみ心を奪はれて居る人は、富めるも貧しきも、常に不安である。

◇然し物質の價値を絶対に否定するのではない、物質も寶であるが、この物質にのみ心を囚はれてゐるが故に、不安を生じ、悲劇をも惹起するに至るのである。

◇光明主義は、實にこれが救済の鍵である。

◇光明主義に依つて、吾等に内藏せる靈性は開發せられ、富める人は富めるがままに貧しき人は貧しきがまゝに、如何なる境遇にある人も、常に光明を仰ぎつゝ、人間と生れ來りし喜びを、本當に感じ、真に樂しく、真に生々した人生を送る事が出来るのである。

◇光明主義は、一切の人々が等しく靈性を開發し、共に光明の裡にあつて、憎みや争ひのない、愛の世界即ち其生極樂を實現せんとするにある。生ける間は、真に心の平和を得て、無上の幸福を感じ、老いるも悲しまず、病むも苦とならず、希望に輝く白蓮精進の生活を續け、死に際しては、またなき満足を感じて絶対安心の下に、大往生を遂げんとするのである。

◇光明主義は、別紙趣意書の如く、近代の大宗教家、佛陀禪那辨榮上人の首唱せられたものであつて、我國に於ける、眞の宗教建設者たる、聖法然上人の眞精神を闡明し發輝せられたのである。

◇光明主義が信奉する御教は、法然上人が専ら信行したまひし『南無阿彌陀佛』である。

◇南無阿彌陀佛とは、無量壽（永遠の生命）、無量光（常恆の平和）に在ます、宇宙最尊の大靈なる、阿彌陀佛に歸命信賴して、ま心に人格の完成を希念する、最も力強

## 會報

大 中央光明會御入會のおすゝめ

◇人は何處から生れ來たのか？

◇人は何がために生きて居るのか？

◇人は死んで何處に往くのか？

◇是は人生の大問題で、何人も知らんと欲して、然も知り能ざるは難問題である。

◇光明主義は、此の大問題に對して、最も明快なる解答を與ふるものである。

◇自分には、悩みも苦しみもないと云ふ人も、眞に心から悩みがないのであらうか、

眞底から安心してゐるのであらうか、それは唯眼前の順境に、目を眩らまされてゐるのではなからうか。

い聖名である。

◇であるから、南無阿彌陀佛は、從來普通一般に考へられてゐたやうな、縁起の悪い事でも、又死ぬためでもない。實に私共が光明生活に入る事の出来る根源であつて、人生の救済となり、生命となり、幸福となり、歡喜となり、暗黒を照らす大光明となるのである。お念佛は、過去を清め、現在を生かし、未來を完ふする大願業力である。

◇人として誰れか光明を求め、生命を希ひ、人格の完成を望まないものがあらうか、私共のこの大なる希望の達成は、決して物質界に求むるも能はざる所で、唯靈界に通ふ事に依てのみ得らるゝのである。私共が靈界に通ふ、最勝にして最良の修養法は、南無阿彌陀佛と申すより外にないと信じます。彼の基督教徒たる故綱島梁川氏すら、「世にも南無阿彌陀佛ほど、宗教的消息を、直截簡明に表はしたものは無い」と稱讃せられしを以ても明かである。

◇南無阿彌陀佛は、必ず救はんとの、やるせない如來の眞實心と、どうしても救はれないとの、切なる私共の眞實心との強い接觸であつて、そこに貴い靈化の威徳を蒙るのである。

◇思ふに、信仰は、單なる議論でも、概念でも、又觀念でもない、眞剣な實修、實感直觀の世界である、體驗の世界である。

◇限りなき、いのちと光(人格の完成)を求めてやまぬ方!

堪えやらぬ、苦惱と憂愁に沈める方!

どうぞ、先づ來つて、光明主義の教ゆる所を聞き、そして眞剣に修養して下さい必ずあなたの人生に、榮光は輝くであらう!!

◇あなたの幸福のため、否な家庭、國家、社會の福祉増進のために、是非御入會を御願ひいたします。

◇光明主義は、宗派の如何を問はず、老幼男女を論せず、萬人等しく生きるの眞實道

四〇

四二

でありますから、何人様も御入會を御勧めいたします。尙今現に國家社會の中堅たり、又將に其中堅たらんとする、青壯年(男女)諸氏の御來會を特に歓迎いたします。

○本會は最も勝れたる、清き信仰の友の集りでありますから、別に會則は設けません。

○本會の例會を、毎月第一第三の日曜日午前八時より午後八時まで開催いたしますから、其時間中何方様(會員外の方も)も御隨意御參會御修養下さい。(午前中念佛三昧午後二時より講話)

○毎月例會の外に、時々特別修養會を開きます。(午前十時より午後二時より講話)

○會場は、例會の前日迄に御通知いたします。

○服装は絶対に華美をさげ、質素、清潔に願います。

○食事の場合は、其の前後に合掌十念して下さい。

○會費は要りませぬ、當日の食事費として金參拾錢御任意に喜捨箱へ御入れ下さい。

○本會は、物質等の御援助は一切御願致しませぬ。

○本會へ御入會御希望の方は左記へ御申込下さい、毎會御案内申上ます。但し入會金は要りませぬ。

中央光明會

事務所 大阪市東區小橋寺町

成道寺 中

◇時は正月、一年の計をなすべき、更始一新の最も有意義な時である。

◇季は嚴冬、草木悉く霜雪を忍び、陽春の來るを待つて、大に發芽開花せんとして潛勢力を養ひつゝある季である。

◇此時季を撰び、光明主義別時念佛修養會を開催して、皆様と共に眞實に此芽出度き新年と同様に、私共の新らしき聖き靈性を、復活さして頂くのであります。

皆様は御尋ねします。新年とは如何なる年なるか。めでたいとは如何なることな

四一

四三

るか。人生とは如何ん。宇宙とは如何ん。天とは何ぞ哉。神とは何ぞ哉。佛とは何ぞ哉。我とは何ぞ哉。何故に生れ出しか。何が爲に生るか。何處に行くか。靈魂は滅か不滅か。永遠の生命とはいかん。人格の完成とはいかん。眞面目に斯く尋ね来れば、限りなく人生の大疑問が湧き出るのであります。

◇皆様よ、刹那の現實を追ふ其手を胸に置いて靜かに冥目せられよ。

◇嘗て佛人一茶は、その愛子を失ひし時叫びました。『露の世は露の世ながらさりながら。』何といふ純眞な心の叫びでせう。

◇「さりながら」然しながら自分では、どうしてもあきらめがつかん。世の中はまゝにしたくて、まゝにならん。『さりながら』と、茲に到り心の糸のもつれを、解いて頂くが佛様である。と、眞に衷心から叫ぶとき、自己の有限の生命と、限ある能力とを自覺して、宇宙最尊の大靈格を認め、之に歸命信賴して永遠の生命と、人格完成とを期せんとする、熾烈なる慾求が湧きいづるのである。

『たましいを享けたるかひやなかるらむ』

盡きぬ生の糧をうけずば。』

近代の大宗教家聖辨榮上人は、御遺訓下さいました。肉體にパンを要求する如く、精神は常に生命の糧を要求して居ます。生命の糧とは何ぞ哉、即ち宇宙最尊唯一の大ミオヤにまします大靈格に歸命「おすがり」することである。

◇悔懼交々至る繋縛の生活より、解脱の生活へ。この眞摯な要求が心の奥底より、起らねばならないのである。

◇今日學を求むるものはあつても、未だ道を求むるに切なるものゝ、聲を聞かないのは、はたして時代の進歩を意味するものであらうか。顧みるに、舉世滔々として利慾に走り、權勢に赴く。思想は渾沌として歸趨に迷ひ、社會組織は動搖して強弱岸に聞く、呪咀の聲のみ頻りにして、愛の呼聲、慈悲の抱擁は聞くべくも求むべくもなし。

◇かゞては、我思想界の權威たるべき佛教も、從來の形式や、儀式のみに囚はれて居つては、到底その大使命を果し難く、甚だ以て心細い次第である。

◇然る時、時代の要求に依り、聖辨榮上人出でまして、古來の因襲と形式を脱し、直に佛教の眞意を體現せられ、我思想界に一大革命を起し、大光明を投せられたのである。

◇聖辨榮上人は、念々不離佛、寢息自ら御名號を呼吸し、法輪恒轉、途上卓上にも猶說法斷えず。三業四威儀佛作佛行。一切時一切處片鱗の私をも見出すに由なし。感化衆に徹して、都鄙慈雨に霑ふと云ふ。

◇其聖者は、今は逝いて居まされども、常に親しく故聖者に接して、其深甚なる哲理を承受し、聖人獨創の體驗的法雨に浴せられし、學徳最も高き、藤本上人を屈招して、修養會を開催いたすのでありますから、皆様は何者かをつかむ事が出來得る事を斷言して憚らぬのである。

◇思ふに信仰は理論ではない、熱であり、火であり、猛火である。觀念や、概念ではなく、直觀の世界であり、體驗の世界である。

◇私共の求むべき所は、宇宙の一大光明に輝く白道に、唯突進するのみである。ち必佛陀の眞生命に没入するのである。そこに尊い智慧と慈悲との大光明を頂き、靈即されるのである。

◇皆様よ、先づ來つて光明主義の教ゆる所を聞き、そして眞劍に修養して下さい化、すああなたの人生に榮光は輝くであらう!!

◇光明主義は、宗派の如何を問はず、萬人等しく生くるの眞實道であるから、たとへ半日でも試みに御來會の上、光明主義が如何に説き、如何に教へ、如何に行する哉を味つて下さい。

中央光明會

大阪市東區小橋寺町

事務所 成道寺 中

大正十四年一月二十日印刷同月二十五日發行